

報告書名：口腔保健分野における国内外の疫学調査・研究の検討：Evidence-based Dental Care
の視点から

研究者名：内藤真理子、中山健夫

所 属：京都大学大学院医学研究科社会健康医学専攻系医療システム情報学分野

[目的] 近年 EBM の概念の普及により、エビデンスの基盤となる疫学研究の重要性が再認識されている。我が国の口腔保健分野も全国的な 8020 運動の推進に伴って、国内外の疫学研究および研究結果への注目度が高めつつあることから、今回口腔分野の疫学研究を文献的に検討し、動向および現状を把握することを研究目的とした。

[方法] 2003 年 3 月に MEDLINE (Pub Med) による文献検索を実施した。Medical Subject Heading(MeSH)として"oral health"、"dentistry"、"epidemiologic studies"を、Publication Type として"randomized controlled trial"を用いた。そして、Journal Citation Report から提供されている 2001 年版インパクト・ファクター(IF)の順位に従って、雑誌毎に掲載論文数の検討をおこなった。

[結果] 今回の研究では、横断研究、症例対照研究およびコホート研究を含む統制語である epidemiologic studies" [MeSH]で検索された論文を「観察的疫学論文」と定義し、RCT 関連論文と共に 1993 年から 2002 年の掲載状況について検討を加えた。

医学分野の RCT を除く疫学論文全体において、口腔分野の同種類の論文が占める割合に経年的な変化は殆ど認められなかった。一方、口腔関連論文全体に口腔分野の観察的疫学論文が占める割合は経年的に増加傾向が認められ、2002 年は 1993 年と比較して約 2 倍の割合を示した。口腔関連論文のうち症例対照研究、コホート研究および RCT 関連論文の占める割合は各々経年的な増加傾向が示され、この中でコホート研究の割合が一番高く認められた。観察的疫学論文掲載数の推移を見ると、歯周病関連雑誌は常に上位を占める一方、歯科総合誌や口腔分野の疫学雑誌からより専門的な臨床雑誌への移行が示唆された。2001 年版 IF 上位 50 位雑誌の観察的疫学論文掲載数の合計が口腔分野の観察的疫学論文全体に占める割合は、過去 10 年間を通してほぼ 60% 以上を保っており、上位 25 位雑誌の観察的疫学論文の掲載合計数は下位 25 位に比べてやや少ない傾向が認められた。

口腔分野の観察的疫学論文あるいは RCT 関連論文の 2002 年掲載数上位 5 位雑誌の 2001 年版 IF は、それぞれ 1.162 ± 0.397 、 1.238 ± 0.250 であった。この 10 誌のうち 9 誌は臨床系の専門誌であり、これらに掲載された観察的疫学論文あるいは RCT 関連論文の口腔関連論文全体に占める割合の推移に着目すると、歯周病関連雑誌はこの 10 年間ほぼ一定の割合を保つ一方、口腔外科あるいは歯内治療、充填関連雑誌の割合は近年増加傾向を示した。

[考察] 今回の検索方法での indexing や検索式による限界を考慮する必要があるが、引用回数の多い雑誌は低い雑誌に比べて観察的疫学論文の掲載がやや少ない傾向が認められた。さらに、口腔分野の疫学論文において、歯科臨床系の専門誌へ掲載される傾向が近年強まりつつあることが示唆された。今後の方向性として、文献的に増加傾向にある疫学研究への取り組みを一層発展させるとともに、口腔関連雑誌にとどまらない幅広い成果発信を活発化していくことも重要と思われた。